

- ① 患者安全と医療の質管理を専門とする医師を養成「ASUISHI」
・診療科レポート「腎臓内科」
・季節のお話／あせもにご注意
- ② 院内感染対策チーム (ICT) のご紹介
・マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知 2015 における救護活動
・ミニニュース
・ナディック通信

- ③ 名大病院アメニティのご紹介
・病院からのお知らせ／提案書からの改善報告
・携帯電話及びスマートフォンの使用について
・東邦高校3年A組の生徒さんより車いすが寄贈されました
・ボランティアさん募集
・禁煙のお願い
- ④ 「優しく、温かく、安全な看護」を実践するために
・新任挨拶
・看護師募集
・健康講座／心臓外科
・かわらばん HP のご案内

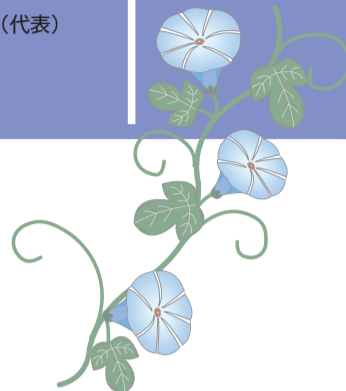
名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。
基本方針 ● 一、安全かつ最高水準の医療を提供します。 一、優れた医療人を養成します。
一、次代を担う新しい医療を開拓します。 一、地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます



TOPICS ① 患者安全と医療の質管理を専門とする医師を養成「ASUISHI」

患者さんに安全な医療を提供するため、平成17年に設置された医療の質・安全管理部。同部が中心となり、秋から新事業「明日の医療の質向上をリードする医師養成プログラム『ASUISHI』」がスタートします。プログラムについて、同部副部長でプロジェクトリーダーの安田あゆ子病院講師にお話を伺いました。

全国に先駆けた取り組み

多くの医療機関が医療安全の重要性は認識していても、なかなか専従の医師を置くまでには至っていないのが現状です。そんな中、名大病院では10年前に医療の質・安全管理部を設置し、患者安全専門の医師、看護師、弁護士らがチームとなり、全国に先駆けて医療安全に取り組んできました。

主な業務は、職員から報告された患者さんに提供された医療に関する問題を調査・分析したり、医学的な見地から診療科とともに対応したり、重大な医療事故が起きた時にはただちに病院を挙げて救命、治療に当たる体制を構築すること。

このような取り組みから得た経験を活かして、患者さんの安全を担保し、医療の質向上を専門とする医師を養成するプログラムが「ASUISHI」です。

製造業の手法を取り入れた教育

患者安全の分野は、日本より欧米の方が10年ほど進んでいます。しかし、この部署に配属されたばかりの頃に読んだアメリカの文献に、TPS(トヨタ・プロダクション・システム)やKAIZEN(カイゼン)という言葉が出ていて驚きました。日本の製造業が安全性と品質管理で優れていることは世界的にも知られており、それがアメリカで体系化された学問となり、患者安全の領域にも導入されていたのです。

ASUISHIでは、この品質管理手法をトヨタ自動車からダイレクトに学びます。日本で生まれ確立された手法を医師が学ぶことで、医療機関の質向上の取り組みも加速するはずです。

人財ハブセンター事業

医療機関にはさまざまな分野の問題が山積しています。履修者はその問題の一つを実習課題として、授業で解決方法を探っていきますが、修了後、どんな難題に直



面することになるかわかりません。そんな時、皆が知恵を出し合える場が必要という思いから、人財ハブセンターを立ち上げることとしました。

カリキュラムを修了した医師を「人財」としてネットワーク化し、情報交換やデータを共有することで、最終的には医療界全体の質の向上を目指します。

患者安全のリーダーを育成

ASUISHIは全国の医師を対象とし、今年10月の開講を目指して準備中です。履修者には約半年間、名大病院を始め、中部品質管理協会、トヨタでの実習、グループワークや、eラーニングなどで学んでもらいます。患者安全をメインに、感染制御に特化したコースも設けます。

事前に全国の医療機関へニーズ調査を行ったところ、回答があった275機関のうち203機関がASUISHIへの参加を検討したいと答えました。それだけ多くの医療の現場で、医療安全の必要性が高まっている証しだと思えます。

ASUISHIで学んだ医師は、リーダーとして所属する医療機関の問題解決を図りますが、その問題に関わった職員の意識を高めることも狙いの一つです。この動きが広まって日本の医療界全体の水準が上がっていけば、患者さんは今以上に安心して医療を受けられるようになることを確信しています。

季節のお話

あせもにご注意

皮膚科 診療科長 秋山 真志



蒸し暑い夏のお肌のトラブルの代表格が、汗疹、いわゆる「あせも」です。あせもは、高温多湿の環境下でたくさん汗をかいた時に、皮膚の中に汗が溜まって起こります。老若男女、多くの方が夏に痒くて悩まされる、よくみるあせもは中等度の深さのあせも、紅色汗疹です。紅色汗疹では皮膚の表面の表皮の中の汗の管に汗が溜まり、皮膚表面にうまく流れず、表皮の中に汗が漏れ出てきて、炎症を起こし、赤くて痒いぶつぶつを作ってきます。あせもの対処法としては、高温多湿の環境を避けること、入浴やシャワーで、涼しく清潔な状態を保つことが大事です。痒い湿疹になってしまったら、掻き崩したり、細菌感染を起こしたりする前に皮膚科の受診をおすすめします。

診療科レポート「腎臓内科」

医局長 坪井 直毅

腎臓は「おしっこ」を作り水分や電解質のバランスを維持する働きを担っていますが、他にもヒタミソドの活性化による骨代謝、エリスロポエチン分泌による造血、リン産生による血圧調節など多彩な機能を有しています。そのため腎機能が悪化(腎不全)すれば、老廃物を捨てることができないうけでなく、さまざまな健康障害が生じます。しかしながら現在の医療では腎不全を治療させる有効な治療手段は確立されておらず、多くが対症療法あるいは血液透析などの腎代替療法となります。それゆえ、我々腎臓内科医は、腎不全診療のみならず、糸球体腎炎、ネフロゼ症候群、糖尿病、膠原病といった「腎不全の原疾患」の診断・治療にもあたっています。さらには他臓器疾患あるいはその治療の結果生じた腎障害にお困りの患者さんの相談にも診療科の垣根を越えて対応しています。ゆえに腎臓内科医は、腎疾患の知識に加え、他臓器の病態についても熟知している必要がある、すなわち腎臓内科医という専門性と内科医としての一般性を併せ持つ内科医だといえます。

名古屋大学医学部附属病院腎臓内科は、関連病院からの依頼を含めて年間700例以上の腎生検病理組織診断を行っています。治療面では従来のステロイド中心の腎炎治療のみならず、抗体療法や新規免疫抑制剤併用療法にも積極的に取り組んでいます。また慢性腎臓病患者さんには慢性腎臓病の知識習得、自己管理、内服薬調整を兼ねた教育入院を実施し、患者さん個々の状況に応じた安全かつ適切な腎代替療法へ繋げています。また市民講座など慢性腎臓病の地域社会への啓蒙活動を通じ、中部地方の腎臓病診療の核として地域貢献を果たしたいと考えています。



腎生検病理検討会

院内感染対策チーム (ICT) のご紹介

中央感染制御部 部長 八木 哲也

皆さんもご存じの如く、感染症という病気は結核などの細菌やインフルエンザなどのウイルス、真菌(カビ)や寄生虫などの外因性の病原体によって引き起こされる病気です。感染症は、どの診療科にもあり、適切に治療すれば治ることの多い病気ですが、免疫力が落ちていると重症になって命にかかわることもある病気です。また、何も対策を講じないとヒトからヒトへと病原体が移っていく可能性もある病気です。薬剤耐性菌の出現や、高度な医療の進歩により病院の中で発生する感染症はますます複雑になっています。病院の中で発生する様々な感染症に対して治療が適正に行われるように支援したり、病原体がヒトからヒトへ水平伝播しないように対策を講じて院内で発生する感染症を減少させることが、私達、院内感染対策チーム (ICT) の使命です。

皆さんもご存じの如く、感染症という病気は結核などの細菌やインフルエンザなどのウイルス、真菌(カビ)や寄生虫などの外因性の病原体によって引き起こされる病気です。感染症は、どの診療科にもあり、適切に治療すれば治ることの多い病気ですが、免疫力が落ちていると重症になって命にかかわることもある病気です。また、何も対策を講じないとヒトからヒトへと病原体が移っていく可能性もある病気です。薬剤耐性菌の出現や、高度な医療の進歩により病院の中で発生する感染症はますます複雑になっています。病院の中で発生する様々な感染症に対して治療が適正に行われるように支援したり、病原体がヒトからヒトへ水平伝播しないように対策を講じて院内で発生する感染症を減少させることが、私達、院内感染対策チーム (ICT) の使命です。

おり、他の診療科や職種の先生方にも協力していただいています。ICTの活動は、検出される病原菌を調査・集計して適切な感染対策を実施する、現場を見回って環境整備や手指衛生などの感染対策がきちんと行われているかを評価する、各診療科の主治医の先生達の感染症診療を支援する、ワクチン接種を推進して予防できる病気の予防に努める、など多岐にわたるものです。また、こうした横断的な感染制御活動を行う専門医師の数はまだまだ少なく、その育成も私達の重大な使命の一つです。

このように私達ICTは、患者さんの前に直接姿を現すことは少ないかもしれませんが、縁の下の力持ちとして横断的な業務を行い、名大病院の診療の「質」を支えています。

ICTは医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務などの多職種から成るチームで、現在は専従医師が7名、看護師が3名(うち感染管理認定看護師2名)、薬剤師2名、臨床検査技師1名、事務員1名がコアメンバーとなつ



院内感染対策チーム (ICT)

マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知 2015における救護活動

救急・集中治療医学分野 高谷 悠大

3月8日(日)に、「マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知2015」が開催されました。(スタート・フィニッシュ地点/名古屋ドーム、参加者35,500名)

世界最大規模の女子マラソンである名古屋ウィメンズマラソンと、名古屋シティマラソンが同時に開催されたこのマラソン大会に、名大病院が、救護班として今年も参加しました。(救急科医師2名、看護師1名、事務職員1名の計4名)

名大病院の救護班は、21.2km地点である白川公園救護場所において待機し、診療に当たりました。この場所はシティハーフマラソンのゴール地点でもあるため、心停止に備えてAEDを担ぎながら沿道に立ち、非常に多くのランナーを観察しまし



た。幸い、心肺停止などを含む重症患者は搬入されず、計62名の傷病者の診療に当たりました。

2012年に本大会が開始されてから、心肺停止に陥ったランナーは0名が続いており、今年も無事0名でした。ただし一般的に、マラソン中に6〜10万人に1人のランナーが心肺停止に陥るとされています。名大病院救護班は、毎年開催される本大会が、「決して安全なお祭り」であり続けるよう、救命第一の視点から、より質の高い救護態勢を追求していきます。

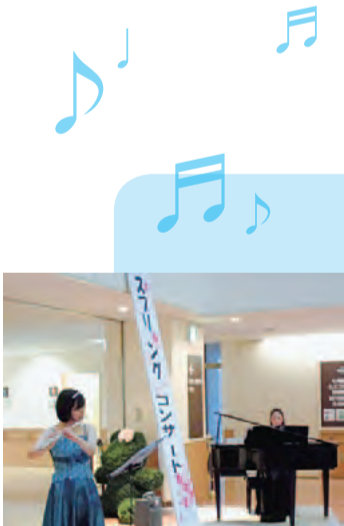
ミニニュース

「コンサート」を開催しました

中央診療棟2階リハビリ広場(現ピアノ広場)にて、2月9日(月)にアカデイオン ソロ・ライヴ、2月25日(水)にフルートとピアノによる春のコンサートを開催しました。季節を感じる曲目や話題の曲目など、参加者は楽しいひとときを過ごしました。



▲2月9日に行われたコンサート



▲2月25日に行われたコンサート

Nagoya Disease Information Center ナディック通信

新看護部長から「広場ナディック」のご案内

皆様、こんにちは。この度、看護部長に就任しました市村です。

名大病院「広場ナディック」は、情報収集・情報交換、なごみの場です。書籍やパンフレット、DVDによる情報提供はもちろん、毎月、学習会、相談、手作り教室などのイベントが開催されています。単なる病院図書室ではない様々な機能や、主に病院OBのボランティアの方々による運営、毎月500人以上の方々にご利用いただいている実績は他院にない、名大病院

の特徴的な取り組みだと思えます。これからも名大病院の集いの場、憩いの場として、多くの皆様に喜んでいただけるように、ボランティアの方々にご協力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



TOPICS ③

名大病院アメニティのご紹介 Part 4

名大病院内にあるアメニティ施設から、本号では、「理容室」と「ローソン」をご紹介します。

理容室

当店は、病棟1階の入退院受付出入口から入って、郵便局の横に位置し、日曜・祝日を除く毎日9時から営業しております。

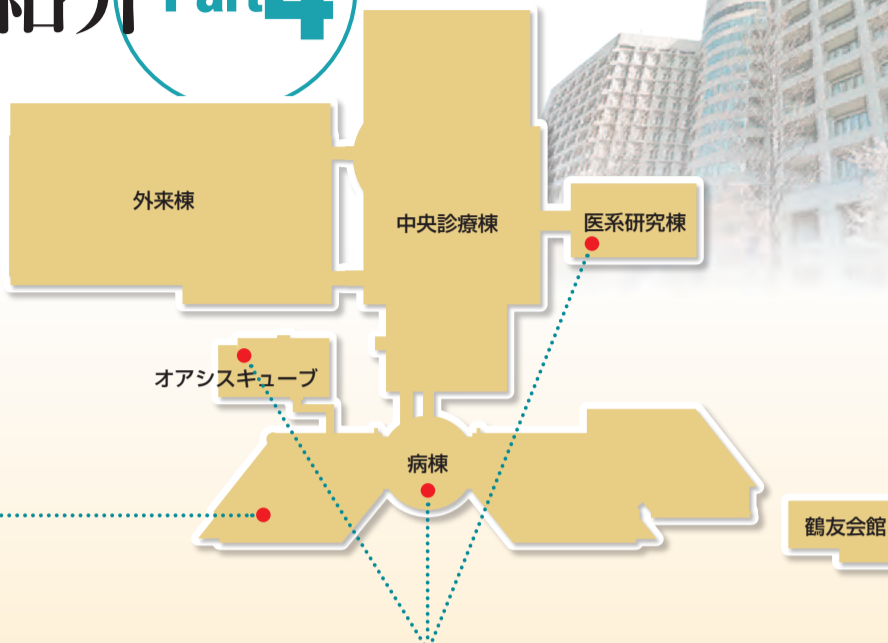
調髪、顔そり、カット等のメニューをご用意しており、患者さんが少しでも快適に入院生活をおくれるようお手伝いをさせていただきます。皆様のご利用を心からお待ちしております。



外観

場所：病棟1階

営業時間：(平日) 9時～16時30分 (土) 9時～15時30分



ローソン

ローソンは、通常の一般的な物品販売、サービス提供のほか、病院に必要な医療用品や衛生材料の販売も取り扱い、患者さんや院内教職員の皆様ほかご利用のお客様のニーズにお応えできるよう努めております。また、院内での飲食スペースをオアシスキューブ内に設けているほか、病棟1階ローソンにも「イートインコーナー」を設け、大変好評です。今春24時間営業をスタートした病棟店など、ローソンへ是非ご来店下さいますようスタッフ一同お待ちしております。



本店外観



病棟店外観



研究棟外観

場所：病棟1階、オアシスキューブ、医系研究棟1号館1階

営業時間：病棟1階 年中無休 24時間営業 / オアシスキューブ (平日) 7時30分～19時30分 / 研究棟1階 (平日) 8時～19時

東邦高校3年A組の生徒さんより車いすが寄贈されました

1月26日(月)、中央診療棟2階リハビリ広場(現ピアノ広場)において、東邦高校3年A組の生徒さんより車いす2台が寄贈されたことに対して、感謝状の授与式が行われました。

生徒代表から、文化祭の収益を社会に還元したいとの気持ちから車いすの寄贈に至ったことが語られ、石黒病院長から生徒代表に感謝の言葉とともに感謝状が手渡されました。その後、病院長、3年A組の生徒代表の皆さん、担任の先生とともに記念に写真を撮りました。

病院長からは、日頃より東邦高校を身近に感じており、車いすの寄贈を受け大変嬉しく思っていることが述べられ、終始和やかな雰囲気でき式を終了しました。



ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

● ボランティアホームページ

<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1411/volunteer.html>



禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

病院からのお知らせ

提案書からの改善報告

当院では、患者さんへのサービス・アメニティー等の満足度向上を目指し、患者満足度委員会において、院内に設置してある提案箱へ投函いただいたご提案からのサービス改善策を検討し実施しています。

提案箱では、現在1ヶ月あたり約100件のご提案をいただいております。提案書を回収次第、患者さんのご意見の速やかな検討を現場で図るとともに、その後委員会にて、いただいた提案書の一件一件における対応策の検討を行うことで、サービス改善を実施しています。

サービス改善における主な内容については、外来棟1階中央待合ホールに設置されているモニターへの掲示により、患者さんへの回答を図っています。

患者さんが利用する設備や機器などは、日々における点検や更新を実施しておりますが、平成26年度下半期では、以下の改善を実施しました。

(院内における主な設備面の改善)

- 1) 入院・外来患者用手荷物カートの増設
- 2) 外来患者用ベビーカーの新調



(院内における主な運用面の改善)

- 1) 平成27年4月からローソン病棟店の24時間営業実施による時間外来院者等への利便性向上
- 2) CT検査室への土足解禁による負担軽減



携帯電話及びスマートフォンの使用について

名大病院では、医用電気機器への電波影響を防止するとともに、迷惑通話を防止し、静かで落ち着いた院内環境を保持するため、携帯電話及びスマートフォンの使用について必要な事項を定めています。詳しくはホームページでお確かめください (<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1385/1512/goraiinnominasama.html>)。

なお、通話は、「通話可能エリア」及び公衆電話BOXに限って可能です。付近の方々に迷惑にならないように、ご配慮の上ご利用下さい。ご理解とご協力をお願いいたします。

やさしく、温かく、安全な看護を 実践するために

名大病院で働く職員は約2,000名。そのうち半数以上を看護職員が占めています。今年4月、当院の看護部長に着任した市村尚子看護部長に、看護職員に求められること、今後の抱負などについてお話を伺いました。



看護部長として、私には二つのミッションがあると思っています。一つは「当院、そして当看護部の歴史を重んじること」。多くの先輩方が長い時間をかけて築き上げてきた組織とその営みに敬意を持って仕事をすることです。

もう一つは、「改革・改善を促進すること」。他機関から名大病院に飛び込んできた私だからこそ見える、名大病院の強み・弱みを皆さんにきちんと伝えたいと思っています。

実践力のある看護師に

昨今、急性期医療を担う大病院においては病床稼働率の向上や入院日数の短縮が求められ、時間をかけて患者さんとじっくり向き合う看護がしづらくなっています。このような環境において当看護部の理念である「優しく温かく安全な看護」を実践していくことは難しく、看護師にとって大きなチャレンジです。これからの時代に求められているのは、患

者さんの暮らしを見ず、つないでいく医療・介護の仕組みです。看護師は、患者さんと関わる時間が少ない中で、つなぐことを意識して「優しく、温かく、安全な看護」を実践しなくてはなりません。これまで以上に、外来、他部署、さらには他施設と連携し、多職種と一緒にいかに速やかに情報共有して方向性を定め、計画立案できるかが鍵になると思います。

患者さんの暮らしという視点で見ると、一部署の看護チームで完結できることは少なく、また、他職種の協力なしに看護だけでできることも多くはありません。看護師には、目の前の患者さんに必要な看護を入院期間という「点」だけでなく、地域での暮らしという「線」でもとらえることや、これまでの経験の枠にとらわれずに積極的につなぐために行動してあげることが求められていると思います。

特に高度な急性期医療を担う当院

においては、これまでと同様に全ての看護師が患者さんの生命を守る看護実践力を身につけること、そして、これからは患者さんの地域での暮らしを支えるためにチーム医療や地域連携についても一層、実践力をつけていくことが必要だと思います。

専門職としての成長を支援

文部科学省で勤務した際、多くの大病院を見てきましたが、名大病院は基盤がしっかりしていて教育を大切に、歴史がありながら先進的な取り組みも行っている、大変魅力的な組織という印象を持っています。

就任して間もないですが、看護師と話をするたびに、「名大病院の看護師は、これからの時代に求められる役割を果たす力を持っている」と実感します。今後、看護キャリア支援室、医学部保健学科看護学専攻等と連携し、看護師一人ひとりの専門職としての成長をしっかりと支援していきたいと思っています。

新任挨拶



事務部長 吉田 勇人

3月までは文部科学省の国立大学法人支援課というところで、中央省庁の立場から86の国立大学全体を支援する仕事を行っていましたが、このたび、大学の実際の現場、特に教育、研究、医療を一体的に行っている大病院で勤務することになったことに、大きなやりがいと緊張感を感じています。微力ながら全力を尽くして参りたいと存じます。

「植込型補助人工心臓治療」

心臓外科 診療科長 碓氷 章彦

私たちが新しい医療として取り組んでいる植込型補助人工心臓治療を紹介します。この治療は、拡張型心筋症や広範囲心筋梗塞などにより心臓の機能が極度に低下し、内科治療で対処できない心臓移植を必要とする患者さんを対象に、移植までの橋渡しとして行われる治療です。左室心尖部から脱血し、血液ポンプを介して上行大動脈に送血し、全身への血液駆出を補助するシステムです。小型の軸

流ポンプを使用するため、ポンプは横隔膜下に移植しますが、電源はドライラインを介して体の外から供給します。バッテリーを持ち運ぶことにより屋外での活動が可能となり、社会復帰が可能となります。

この治療には、心臓移植適応認定を受ける必要があります。私たちは心臓外科、循環器科をはじめ、麻酔科、ICU（集中治療部）、精神科、ICT（院内感染対策チーム）、看護部、ME（臨床工学技師）、心リハ（心臓リハビリテーション指導師）、薬剤部、栄養士など、多くの部署からなる多職種カンファレンスを開催して、心臓移植の適応検討を行うとともに、補助人工心臓移植患者の治療方針を決定しています。2013年に植込型補助人工心臓の施設認定を取得し、現在までに7例の手術を行い、4名が職場復帰しています。今後は、重症心不全治療を更に発展させ、心臓移植の実施を目指します。



看護師募集



当院では看護師を募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

●看護部ホームページ
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/kango/index.html>